

覚醒の墮天使

吹雪狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ー浦の星学院に入学した津島善子

彼女は墮天使を称する華の高校生である。そんな彼女にある日突然…

果たして、彼女の命運は… 彼女はA q o u r sを、仲間達を困難から退けることは出来るのだろうか…

※男主 オリ主 厨二病 多少のオリジナル設定 多分糞つまらない 恋愛要素はある… かもしれない キャラ崩壊 最早ラブライブじゃない s sでやれって言われそうな内容 浦の星女学院が共学になっている ストーリー準拠とはいえ、あくまで

ifストーリーであり、本編の番外編みたいなものです。

それでもよかったら御読み下さい。

お知らせ

今までは不定期更新でしたが、これからは週末更新でいきたいと思います。
番外編は不定期です。

目次

特別編

特別編 小原鞠莉生誕編

46

1話	入学の前夜	1
2話	入学と生徒会	6
3話	スクールアイドルと転校生	11
4話	復活の墮天使	16
5話	海開き	22
6話	墮天使と悪魔と……	26
7話	東京へGO!	32
8話	海獣の王 降臨	37
番外編		
番外編 1	主人公設定	42

1話 入学の前夜

ある日の夜……

「やつと明日から入学式ね…… 私の高校デビュー…… リア充に、私はなる！」

「善子。楽しみなのは分かるが、明日に備えて早めに寝ておけよ。」

「ヨハネはわかかってるわよ。お兄ちゃんに言われなくてもね！」

私は津島善子。明日からお兄ちゃんがいる浦の星学院に入学する華の女子高生

楽しみなのよね。明日から始まる私のリア充ライフが……

「お前…… その墮天使キヤラやめるって言ってなかったっけ……」

「あ…… また出てしまったわ……」

「…… はあ。仕方ないな。今日は付き合ってやるよ。お前のそれが出ないようにな。」

「そうね……。助かるわお兄ちゃん。」

この、私の墮天使が出ないよう手伝ってくれる人は私のお兄ちゃん。名前は津島善（つしま ぜん）私の自慢のお兄ちゃんよ。かつこよくて頭も良くて高校でも生徒会をやってるんだからね。この私、美少女のヨハネの兄なだけあってね。

っと、これから私の儀式が始まるわね……

——同刻 別所にて…

「楽しかったわね。久々のお出掛け、もといデートは♪」

「姉ちゃん…デートって…俺ら姉弟だろ…」

「いいじゃない別に。私は奏のことが大好きだし。」

「…まあいいけどさ。」

俺は驚喰奏（わしばみ かなで） 今日には部活が休みだもんで姉ちゃんと出掛けてきた。姉ちゃんはデートって言っているがな…。

自慢じゃないんだが、俺の家は親がかなりお偉いさんで、両親共に家にいないことがほとんどだ。だから昔から姉ちゃんと二人のことが多いんだよ。その結果かな？姉さんがあんなに俺のことを気に入っているのは…。まあ、実際にかんりの美人でスタイルも凄く完璧なんだよな…。悪い気は全然してない。真夏でも平気で寢床に入ったり、俺の部屋で着替えるのはやめてほしいが…。

ちなみに姉さんは驚喰神愛（わしばみ かなな） 可愛い名前の？ って、それ言うとなんかシスコンみたいだな…。

「ところで奏。最近サツカーはどう？」

「あ…普通に上手くいってるよ。全国選抜にも選ばれてるし。」

「ふふっ… 流石ね。あなたは本当に私の自慢の弟よ。」

あー… だから胸を手に押し付けらな… まあもう言っても無駄だが…

あ、会話から察したと思うが、俺はサッカー部だ。それも全国選抜に選ばれる程の選手だよ。

自慢に聞こえるだろうが、俺のシユートはプロを含めても3本の指に入るくらいのシユートとも言われている。

でもそんな俺だが、実際DFには全く向いてないし、ドリブルだってそこまで脅威でもないと思う。

まあ、俺は曜さんみたいになんでも出来るようなハイスペックって訳ではないからな…。

あ、曜さんってのは、俺の友人だ。最も、彼女は水泳をしてる訳だが…。

彼女は高跳びの強化指定選手に選ばれてる人だ。互いに国から選抜があるっていうことで知り合ったんだが…。まあ、互いに互いをテレビで見て、偶然会ったってだけだな。

多分クラスで一番仲が良い異性は彼女だろうな。恋愛感情があるかと言われると、俺の好みではないから違うが…。

「あ、明日から学校よね。明日は私が気合い入れて弁当作るから、期待しててね。」

うん。確かに楽しみだが：： 重箱3つは流石にやり過ぎじゃないのかとは思うがな：：。少し恥ずかしい

まあ、周りにわかる時もあるし、俺もかなり食事が必要なのな：：。俺としては有難いが

「あ、じゃあ俺は今日はもう寝るよ。明日は早く行って生徒会の仕事をしないといけな
いし：：。」

「頑張るわね：：。辛くなったら無理しないでね。いつでもお姉ちゃんに甘えてきても
いいからね。」

：：。それは半分くらい個人的な欲だろ：：。

まあ、それは置いといて：：。

俺は一応生徒会に所属している。と言ってもほとんど部活で行けてないがな。

まあ、俺に関しては完全に黙認されているようなものだ。何せ全国選抜のメンバーだ
し。

だが、流石に明日は朝だから来いつて会長に言われてるからな：：。まあ、たまには手
伝いに行きますか：：。

あ、これは俺の予想なんだが、会長と書記長ってどう考えてもデキてるようにしか見
えないんだよなあ：：。仲が良いのは良いことだが：：。

さて、そうこうしてる間に、俺の部屋についた。
俺は明日に備え、すぐに寢床に寝転がり、眠りについた……

——

2話 入学と生徒会

——目が覚める

目が覚めると、目の前には俺が一番憧れている人……のポスターがある。

その人は、俺と同じ灰色っぽい髪色で、頭にトサカみたいなのが生えている髪型の人だ。

……もうお気づきの人はいるだろうが、その憧れの人つてのは、μ'sの南ことりちゃんだ。

部屋にはあちこちにことりちゃんのグッズがある。……要するに俺は所謂オタクという人種だ。

ちなみに、ことりちゃん以外にも、真姫ちゃんや希ちゃん、後は……AIRISEのあんじゅ様もお気に入りだ。

そういえば今日は姉さんが早出だから今は家にいないんだよな……。

俺はいつものようにことりちゃんみたいなトサカを作り、朝食を摂り、身支度をして家を出る。

——暫くして…

やっと学校に着く。沼津から登校はやはり色々と面倒だ。

じゃあなぜこんなとこに来たのかって？別に学力に問題があつた訳ではない。まあ、中学時代に色々あつてな…。どんなことがつて？まあ、そこは追々な…。

つと、こうしてる間にも生徒会室に着く。

「おはようございます。生徒会会計の鷲喰奏です。」

「御早うございますわ。意外と早かったですね。もう少し遅いと思つていたので…。」

「まあ、普段全く来れてないですからね…。こういう時くらいは…。」

「あら、貴方は別にいいんですのよ。選抜メンバーですし…。そっちの方を頑張つていらしてるのなら…。仕事なら私や他ですればいいことですからね。」

この人は生徒会長の黒澤ダイヤって人だ。どうやらこの辺りのいいとこの娘さんなんだとよ。つまり、お嬢様つてとこだな。少し抜けてるところがあるが…。

実は、彼女のことは割と小さい頃から知つている。といつても、彼女の親とうちの親とのつながりで、時々会う程度だったんだがな。段々会う機会も減つていったけどな。

で、未だにその時の影響があるのか、俺は彼女から弟のような扱いを受けている。可愛がられてるのか、からかわれてるのかはよく分からんが…。

「それで、話は変わりますが、貴方には入学式の会場の最終準備をして頂きたいのですわ。まだ少しだけ残っていますからね。すぐ終わりますから、任せましたわ。」

「了解です。そして、書記長は…?」

「善さんは彼の妹さんの件で遅くなるって仰ってましたわ。私もこの後の挨拶やルビイのことで手が離せないですからね…。頼みましたわ。」

「あー…。そういえばあの人も妹いるって言ってましたからね。ルビイちゃんも結局ここに入学することになったんですね。」

「ええまあ。ルビイも喜んでましたわ。久しぶりに奏さんに会えるとなって…。」

「久々…。ですねえ…。」

「貴方に色々あつてから、会わなくなりましたから…。まあ、今となつてはそれは昔の話ですわ。貴方も前とは違いますし。また昔みたいに、ダイヤお姉ちゃんって呼んでもらつてもいいのですのよ。」

「うっ…。／＼／＼ 遠慮しておきます。つてな訳で、早速準備に行つてきます。」

… 黒歴史だつてのそれは…。 黒澤だけに。

おっと、準備に行かないとな…。

—— 準備終了後

やっと終わった……。確かに少しだけだったが、意外と時間がかかったな……。

会長から終わったら自分の教室に戻っていいって言われてるし、戻って大量にある弁当の一部を食うとするか。少し腹も減ったし……。

座席を確認すると、案の定曜の前の席だ。近くに友人がいるってのは安心感が違うんだよなあ。

「あつ、奏君。おはヨーソロー!」

「相変わらず元気だな曜は……。てかなんなんだおはヨーソローって……。おはようって意味なのか!」

「正解!流石だね。」

そうやって曜と少し雑談しながら弁当食っていると、もう一人の女の子が近づいてきた。

「おはよー!曜ちゃんに奏君!!」

そう、曜の幼馴染の高海千歌さんだ。

彼女は入学してから割とすぐに仲良くなった人だ。曜との仲もあるがな。

「あ、奏君またお弁当食べてる。卵焼きと唐揚げもーらいっ!」

良いやつなのに変わりはないが、無断で弁当の一部を食うのは少しやめて欲しいが……。

「美味いだろ。姉さんの弁当は。」

「うん。とても美味しいよ。最初こそこんな大量の弁当に驚いたけど、もう見慣れちゃった。ね、曜ちゃん！」

「あはは：：。確かにね。」

「ところで、千歌さんにしては早くないか？」

「失礼だなあ：：。まあ、今日は準備があるからね！曜ちゃんと。」

「準備：：？なんだそれは：：。」

「今は秘密！じゃあ行こうか、曜ちゃん！」

「そうだね！」

なんだ？曜も一緒になって：：。まあいいや。

俺も弁当を片付けて、部活勧誘の様子を見に行くつもりだからな。

3話 スクールアイドルと転校生

——外では部活勧誘をしている。

俺は迷うことなくサッカー部の勧誘を探して見つける

「よお帝。勧誘の準備はどうだ？」

「奏か……。準備は万端だ……。にしてもすまん。お前に色々任せてしまつて……。」

「別に構わんよ。その代わり勧誘の方は頼んだぜ。人員不足じゃなくてもいいようにな……。」

こいつは火神帝（かがみ みかど）俺と同じサッカー部の部員だ。

想像の通り奴はキーパーだ。なぜ想像通りか？帝だからさ。王は最後の砦だろ。

まあ冗談はさておき、奴は俺と昔からの親友で、俺と同じく選抜メンバーだ。奴以上のキーパーなど全くないだろう。ドリブルやロング以外のキックは下手くそだがな……。

ちなみに俺らのサッカー部はいわゆる少数精鋭だ。大会に出れないような人員不足をかつこよく言うな？余計なお世話だ。2，3年合計で5人だが、一応全員選抜メンバーだし……。

「そうだな……。この高校のメンバーだけで大会出たいしな……。」

「おっと、また後の仕事入ってたわ……。任せたぜ」

俺は帝に任せてこの場をあとにした。

——数十分後

「やつと終わった……。さて、入学式が終わった頃だろうし、俺も様子見に行くか……。」

俺が見に行くスクールアイドルという声が聞こえてきた。

一応スクールアイドルには興味はあるため声のした方に行ってみる

「春から始まる、スクールアイドル部でーすー」

声でわかっただけだが、やはり千歌さんだった。曜も一緒だ

「……結局これだったのか……。お前らがする事って」

「まーねっ！ やつとやりたい事が見つかったんだ！」

「それは良かったな……。ところで、他の部員は……？」

「うーん……。実はまだ私だけなんだよね……」

おい、部結成には五人以上は必要なんだけど……。　　というか曜は違うのか……？

「そうか……。是非とも勧誘頑張ってくれよ。」

「ありがとう！ 頑張るよ！」

……。　　まあ深く考えても仕方がない。俺はそう思って帝の方へ行く

「……どうだ？調子は」

「いや〜……うまくいかんね……。」

「まあ、そんなもんだろ……。人多くないし」

そうして帝と話していると、ピギヤアアアアアアア！という声が聞こえてきた。

この独特な叫び、この声……。間違いなくルビイちゃんだろうな……。

人見知りでも発揮したんだろう。が、様子を見に行くか……。

——俺が様子を見に行くと、三人の女の子が一列に並んで走っていた。

一番後ろにはやはりといったところか、先程の声の主、黒澤ルビイちゃんがいた。

後は……。ルビイちゃんの友達だろうか……。一番前のはそうにも見えないがな……。

「あちゃー……。早々やらかしたか……。」

「善先輩じゃないですか。知ってるんですか？」

「知ってるも何も、一番前のは俺の妹なんだわ……。」

「あー……。なんか見覚えある雰囲気だとは思ってましたがね……。」

なるほど、彼の妹さんか……。しかし、彼女は見た感じなんか普通ではない気がするな……。

「あの子達……。後でスカウトに行こう！」

なるほど……。千歌さんから見て合格と……。

とりあえず話しかけてみるかと思っただが、やめておこう。会長の気配を感じる上に、見られると面倒だ……。

俺はこつそりとその場をあとにした。

「あなたですの？このチラシを配っていたのは」

……これは修羅場になりそうだな……。

——その日の夜

先程まで曜と話をしていた。

長くなるし結論から言うが、曜もスクールアイドルを水泳部と兼部してやるつもりとの事だ。

あの後話した時はやらないと言ってたがな……。まあ、その後何があったかは俺は知らない。

というか結局許可は出てるのか……。？あの会長が許可するとは思えんが……。もしくは否認も無視したか……。だな。それなら俺は黙認するつもりだ。

千歌さんは前までは特にやりたいことがなさそうだったからな……。見つけたのなら良かっただろう……。

俺ももう寝ることにした。

——翌朝、教室にて

俺が朝買い食いしたあんぱんを食べていると、担任が入ってきた。ちようど食い終わったから何もバレてないがな

その後すぐに、赤と紫が混ざったみたいな色の髪をした女の子が入ってきた。

ふと、ちらつと千歌さんの方を見ると、知ってる人を見るかのような感じだった。友人なのだろうか……。

その女性が、教卓の前に立つとこう言った

「今日から音乃木坂学院という所から転校してきた、桜内梨子です。」

音乃木坂学院!? ことりちゃんの母校から……だと……!?

4話 復活の墮天使

——あれからの事を簡潔に話そう。

桜内さんが転校してきた時、千歌さんが早速桜内さんを勧誘していた。

彼女は最初こそ嫌がっていたが、どういう訳か彼女もスクールアイドルになった。

その後、グループ名もA q o u r sという名前に決まり、最初のライブも行われた。

……結論から言うと、最終的には体育館が満員になったから、大成功だと言えるだろ

う。にしても、開演時間を間違えるとはな……。流石千歌さんだということか。てか

曜や桜内さんも気づかなかったのか……。？まあ実は俺も気づいてなかったが……。

……とにかく、見事だったと言えるな。彼女達には可能性を感じた。あとは……人数

が欲しいな。μ'sみたいに9人……。お前の理想だろって？……。某海賊団だって9人だ

ろ。つまりそういうことだ。

そして、それに影響されてかは知らないが、その後に二人入ったとのことだ。ルビィ

ちゃんとお友達だ。ルビィちゃんと会った時に喜びながら話してたな……。

というわけで、これで今までの話は終了だ。

——そして、放課後

今日はサッカー部はオフだ。だから、俺は生徒会の仕事を手伝いに生徒会室へ：：と
いうところだが、手伝いに行くと言ったら、会長が、今日は理事長室へ行つて理事長の
手伝いをして欲しいという依頼がきた。

理事長つて：： 確か生徒がやってるんだよな：：。大丈夫なのだろうか：：。

理事長室の前に着くと、ドアを軽くノックし、許可を得て入る

「失礼します。本日理事長の手伝いを頼まれて来ました、驚喚奏です。」

「サンキュー！話はダイヤから聞いてるわよ〜」

この理事長、小原鞠莉さんはアメリカ人とのハーフらしく、この学校で理事長と生徒
を兼任している。カレー牛丼みたいなものらしい。

ちなみに上記の話は全て会長から聞いたことだ。実際会うのは初めてである。が、初
めて会う気は何故かしない。どうしてだろうか：：。

「：： 写真で見るより可愛らしいわね：：。」

「ん？何か言いました？」

「何も言つてないわよ：：。それより、奏のことよね？シユートが物凄く強いことで有名
なのつて？」

「俺の事ですね。知っていたとは光荣です。」

「うふふ：： 期待してるわよ。今後の活躍も。」

流石理事長。情報が早い。

「とりあえず仕事の話に戻るわね。生徒会や先生から送られてきた書類の整理をしてほしいの。私は別の仕事があるから……。」

「了解です。」

俺は仕事を始めてしばらくしたら、彼女からコーヒーを淹れてほしいと言われたので、ご要望通りコーヒーを淹れる。しかし、ブラックで飲めるとか凄いな……。俺なんて未だに砂糖とミルクをたっぷり入れてやっとな飲めるくらいなのに……。

「はい。ご要望通りブラックのコーヒーをお持ちしました。」

「サンキュウ 仕事の調子はどう？」

「もう少しで終わりそうですよ。雑務は慣れてるもので……。」

「Oh! That's great! 聞いてた通り仕事が早いわね。どうかしら？ これから私直属の理事長秘書になるのは。勿論、集中出来ない時の処理もしてあげるから」
♪

「あ……いや、別にいいですが……。」

「ふふ…… It's joke 意外と可愛い反応ね。」

駄目だ……。完全にペース乗せられて……。会長がなかなか敵わないっていうのがわかった……。

「…はあ。やれやれ…。」

結局俺は仕事に戻り、仕事をすませて理事長室をあとにした。

その後、物凄く嬉しそうな様子で帰っていく女の子を見た。

別にそれ自体は大したことではないが、よく見ると、入学式の時に追われてた女の子だった。善さんの妹さんだ。確か、善子ちゃんだっけ…？そんな感じの名前だった気がする。

——今日は久々にアイドルショップにでも寄ろうかな。μ'sのグッズ漁りに

——その後（ここから善子視点です。）

「ふふふ…。いよいよ私も明日からリア充ね…。いざという時はずら丸に抑えてもらうし。」

あれから私は暫く不登校になってたわ。結局、明日から行くことにしたけど。

不登校の間は、沼津を彷徨っていたり、生放送をしたりしてたわ。内容はあえて言わないけど…。

とにかく、明日が楽しみね。

——少し離れた場所で（ここからは台詞のみ）

「おい、見ろよあれ。懐かしい奴じゃん。」

「お、津島じゃん懐かしい。」

「えっ？誰だよあの女」

「あゝ……うちの中学の同級生。時々遊んであげてた奴。」

「久々に金でも貰ってこようかな。それかサンドバッグにするか。」

「おいおいwwwそれなら、その前に回させてくれよ。何人が男呼ぶからさ。ふへへ……あれは中々上玉だな。この後が楽しみだぜ……。」

「……おいおい。何話てんの？」

「あつ……聞いてた？なんも聞いてねえよなあ？」（胸ぐらを掴む）

その直後

「悪いけどさあ、俺、最近かなり力見風ぎってんだわ……。あの女で楽しませてもらう前に、まずはお前をボコるとするかww」（胸ぐらを掴みながら）

——その直後

「はあ……。力の差がわかんねえって随分と幸福な事だな。」

「はあ？何を言っ……うっ……」

「なっ……テメエ、よくも……ッ……。」「な、なんだよこ……」

「え……嘘でしょ……？簡単にやられるなんて……。」

「よし、次はお前達か……。」

「は？女に手出すとかマジであり得ないんですけど？」

「んなことは関係ないね。」

一瞬でその場にいた男3人女2人は倒れた。

「まだ、こんだけじゃないんだよな……。出てきな。」

「なっ……まさか俺達の存在が……。」

「……所詮下級悪魔5体か……。一瞬で葬ってやろう……。」

「一瞬でだと？ただの人間ごときに俺らを「ファイアボール！」

特大の炎球が悪魔達を襲う

その直後、そこには悪魔と呼ばれたもの達は跡形もなく消え去っていた。

———どうやら、この世界には魔法を使える者と、悪魔が存在しているみたいだ。

5話 海開き

——あれから数日経った

結局、善さんの妹こと善子さんもA q o u r sに加入することになった。

それとほぼ同時に、統廃合の知らせが来た。

最も、千歌さんはμ'sと同じ展開だと喜んでいるが…。

そして、当然それを阻止するため、P Vを作ったとのこと。

今日は理事長にそれを見せに来たのだが…。

「……………」

部屋にただP Vの音だけがする。偶然だが、俺もその場に居合わせた。また会長からの命令だ。

しかしこのP V、お世辞にも良い出来とは言えない。少なくとも俺はそう感じた。

「どうでしょうか…。」

千歌さんが沈黙を打ち破る。すると理事長は

「…はっ!!」

「もう…本気なのに… ちゃんと見て下さい!!」

「本気？それでこのテイタラックでーすか!?」

どうやら、理事長にとつてあまり良い感じではなかったようだ。

曜達がそれに反論するも、理事長は

「努力の量と結果は比例しません！大切なのは、このタウンやスクールの魅力を、ちゃんと理解してるかです！」

それには一理ある。

やがて、彼女達は部屋から去った。俺も部屋を去り、その後、偶然体育館を通る

体育館を通り、何気なく中を覗いてみると、会長が書類を持ちながら踊っていた。

彼女は俺には気付いてないようで、そのまま同じような行動をとっている。

俺はその場を去ろうとしたが、やはりそのまま見続けていた。見とれていたと言われると、やはりそうだろう。少しだったが、素晴らしいものだった。スクールアイドルでもやるべきだろう。

もしくは、以前やっていたとか……。少なくとも素人ものではない。

俺が話してみよう……。と思ったが、

「……その必要はなさそうだな。」

既に千歌さんが入っていた。これは彼女達がするべきだろう。俺が手を出しちやいけない。

——その後を日の早朝

「…ゴミ拾いめんどいな…。クラ〇ワやろ…。」

「お前…ゴミ拾いサボるなよ…。」

「まあ、気持ちにはわかるよ…。僕なんて30分しか寝てないし…。」

「だから言っただろ…。海開きの前日にポ〇モンするなって…。お前は一回対戦したらその後10回は続くし…。」

そう。今日は海開きである。

海辺のゴミを拾う等をするんだ。勿論、ここにいる俺と帝と俺らの友人の海鳴 白

(うみなり はく) も参加のな。

俺等以外にも多くの人達が参加している。知った顔も多い。

「私達、浦の星学院でスクールアイドルをやっているA q o u r s です!!」

千歌さんの声でした。相変わらず元気だな。

そして、彼女の話から入り、6人で歌った。

——素晴らしいものだった。

それと同時に、俺は確かに感じた。彼女達がこれからさらに成長し、大きな存在になっっていく可能性を…。

いや、可能性じゃない。きっとそうなるだろう。

そして、彼女が最初に言ってたように、ここにいる皆の気持ち、それが形になっただろう。

——Aqoursはまた一歩、前に踏み出した。

——その一方で

「奴がか……。少し時間がかかったが、やっと見つけたぜ……。」

6話 墮天使と悪魔と・・・

私、津島善子はあれ以来A q o u r sに入つて今では普通に学校に通つてゐるわ。

それからというもの、お兄ちゃんもA q o u r sの活動を手伝い、先日東京でのライブにも呼ばれた。

ほんと楽しみね。あまねく魔の者が闊歩すると言われる東京に行けるなんて・・・。

明日の事だし、少し不安もあるけどね・・・。

今日は明日に備えて早めに帰っているのよ。曜さんは事情があつて、私一人だけけどね。

もうすぐ家に着く

だけど・・・

何かしら・・・なんとなく妙な気配を感じるのよね。気のせいだと思いたいけど・・・

まさか・・・墮天使が私に力を与えるために・・・なんてね・・・

・・・そうして少し歩いてたけど、やはり変・・・。

ここは路地に回つて・・・そして立ち止まってから

「ねえ・・・。まさか私が気付いてないと思つて？」

何も返ってこない。けど気配はしっかりと感じる。

「早く出てきなさいよ。気付いているんだからね」

「ほう... 俺に気づくとは、やはり... か。この女で間違いないな。」

なっ... 悪魔...!? どうして?

「あ、悪魔...。私がおかしたって言うの...?」

「貴様を知る必要はない。ここで死ぬのだからな」

「ここで死ぬ!? 私はこの悪魔に殺されるの!？」

「喜べ。貴様はこの俺、ベリアルが葬ってやるからな。」

ベリアル!? あの悪魔が...

ど、どうしよう...。殺される...。

...。ごめんなさい。A q o u r s や家族の皆... 楽しかったわよ...。

「黒焦げになるがい... クソツ!? 砂埃で目がツ!？」

...。突然起こった砂埃で私は助かったみたいね...。とりあえずここから逃げ

「ちよ、ちよつと! 私をどこに連れていくのよ!？」

「説明は後だ! 今は俺についてこい。」

いきなり知らないけど、見覚えはある男の子に連れられた。

——場は変わって

とりあえず、私は助かったけど、男の子に連れられて、離れた場所に来た。

それにしてもこの男の子、可愛い顔立ちしてるわね。その上私より背が低い

「……とりあえず、助けてくれてありがとう。」

「いや、礼には及ばない。それより、奴も時期にここに来るだろう。」

この口振り……もしかして何か知ってるのね……。なら丁度良いわ。

「ねえ……。さっきの悪魔は何故私を狙ったのかわかる？」

「……話すと長くなるが……。」

それから、彼は話してくれた。

信じがたい話だけれど、私は悪魔を倒す血統を偶然持つており、悪魔の王 サタンが自分たちが倒されることを危惧し、私を倒そうと狙った。とのこと。

彼が何故それを知るか、なんて事はこの際どうでもいい。とりあえず、私が狙われている。これは事実……。だけど、私はその血統を継いでいるとはいえ、今はまだ奴らを倒す術がない……。これは致命的ね……。

「……しかし、どういうわけか君の家では君しかその血を継いでないのだ。何故かはわからないがな」

「そう……。それで、どうしたら悪魔を倒す術を……？」

「残念ながら、そこまでは知らない。だが、君は最近少しずつ力を蓄えているようだ。A

oursに加入してから... くらいだろうか...」

ツ... どうして私が... と思ったけど、よく見たら彼、浦の星の制服着てたわ...
 なんでさつきまで気付かなかったのか...」

「... もしかして、私の血統しか悪魔を倒せないの?」

「残念ながら、その通りだ。だが... 「おっと、やつと見つけたぜ!」

うっ... さつきのベリアルが追い付いてきた...」

「さーて... 今度こそ殺させて貰うぜ ダークネスフレア!」

やばい... 殺される...

と思った刹那、黒い炎が一瞬にして吹き飛んだ

「くそっ... さつきから風に邪魔されて... まさか... その小さい野郎が...」

「ここは俺に任せろ。奴は俺なら葬れる。」

「えっ!? けど、私の血統しか悪魔は倒せないんじや...」

「さつきの話の続きだ。世の中には、天使に憑依された者もいる。その者なら魔力を持ち、悪魔に対抗出来る。特に、大天使等に憑依されれば、並の悪魔なら簡単に倒せるさ。」

「つまり、さつきの風は、そういう者に... もしかして貴方...」

「ああ、お察しの通りさ。俺がそういう者だ。とにかく、ここは俺に任せて、早く逃げろ。」

「わかったわ。それと貴方、名前は？」

「……驚喰奏。あんたの兄の知り合いさ。」

驚喰…… お兄ちゃんの知り合いなのね。そういえば、そんな名前の奴がいるって噂は聞いたわね。有名らしいし。

「……話は済んだか……。奴ごと殺すつもりだから、猶予を与えてやったが、もう良さそうだな。」

「殺す…… か……。俺を、舐めないでよね！」

「……ッ！ラファエルだと……。」

なっ…… ラファエルだって!?あの三大天使の!

どうりであれほどの知識と自信が……。とにかく、奏なら大丈夫そうね。

——その後（ここから奏視点）

「クソッ!クソがッ!この俺が……!」

『あら、こんなものなのね……。まだまだ私は余裕なのだけど……。』

「おのれ……。ならばこれはどうだ……。 ヘルファイヤー!」

『その技、さつきも見たわよ。風起こし!』

「甘いな!インフェルノバーン!」

『不味いわね……。ウインドウオール!』

よかった…。なんとか防ぐことが出来た。

俺は言わば二重人格のようなもので、戦闘の時は俺に憑依したラファエルが俺の体を使っている。

俺にも魔力は使えるが、ラファエルの時と比べて使える量が少ないのと、魔法に関しては彼女の方が上手だ。

「クソツツ！また防がれた！」

『… 奴の魔力が少ない…。止めを刺すなら今ね エアスラツシユ！』

まあ、魔力切れの状態で、彼女の風の刃を避けれる訳もなく、当たり

「貴様ごときに…。貴様ごときにイー！」

そう言つて、奴は動かなくなつた。

『ふう、少し疲れたから寝るわ。』

そう言つて彼女は俺の中で眠つた。まあ、彼女曰く、本来より魔力が限られてるらしいからな。

しかし、俺には何故か少なからず魔力回路があるようで、彼女にそれを目つけられて憑依された。

7話 東京へGO!

—— 駅前

なんと、今日はA q o u r sの皆様が東京に行くことになりましたー!

：： 少しはつちやけてみた。たまにはいいだろうというの。

まあ冗談はさておき

前述の通りA q o u r sが東京に行くことになったんだが：：

「善子じゃなくて：： ヨハネ!」

大丈夫なのかこの人：： 肌白塗りしてるし：：

ん?なぜ俺がここにいるのかって?見送りだよ。まあ、友人だしな 特に曜は

それに、彼女達にも一つ用があるしな：： と思った矢先

「これ、クラスみんなから!」

なんだ：： 俺の用もう終わりじゃねえか：：。大量ののつぽパンあればもうこれ必要

になるのか?

：： まあいいや、これを1人で全部食うのもあれだしな：：

「奏くん!? 奏くんも来てくれたの?」

「まあ、色々と用があつてな。まず、必要かは分らんが、帝からだ。」

そう言つて俺は帝特製の菓子を全員分渡す。

あいつの菓子めちやくちや美味いんだよな。豆知識だが、あいつめちやくちや料理出来るんだよな。もう料理人になれよどころか自分で店開けば大繁盛じゃねえのつてレベルだ。

「帝くんから？ 是非頂くよ！帝くんはかなり美味しいし」

「帝つて。火神君よね？あの人。かなり意外。普段からは想像出来ないわ。」

桜内さん。何気に失礼だな。

「それと。折角の東京だ。悔いのないように精一杯やつてきてくれよ。」

「奏君。ありがとう！ やっぱり奏が言うと凄みがあるね！」

そりやどーも ま、影ながら応援してるぜ。

。もう彼女らは東京に着いている頃だろうか。

ただ、俺には善子さんの事が気がかりだ。東京は悪魔が結構いそうだからな。

まあ、それもあつてか、俺は東京にいる選抜繋がり友人の優木 靈苑（ゆうき おん）と電話中だ。

「ところで靈苑、この前お前が気になるって言ってたA q o u r s が今東京にいます。何処かは知らんがな。」

「なんだって!?!お前それを早く言えよ! あんじゅ姉達以上に凄くなるかもって予感してるA q o u r s がここに来てるのなら一目拝ませて貰おうと思ってたのに...。」

「こいつは言った通りあんじゅ様の従弟にあたる奴だ。結構仲良いらしい。正直羨ましく。」

「ま、まあ俺の本命はことりちゃんだし...。」

「悪い悪い... でもあんじゅ様より凄くなるかもって相当だな...。」

「どうだかな。あくまで予測だし... ん? 見つけたなあ...。」

「おいおい... 手出すなよ女たらし。」

「当たり前だ。流石に俺でもアイドルには手は出せんよ。」

——その場近くの路地裏

「おい、あれがベリアルさんが見つけたって噂の...。」

「ああ、間違いないな。奴だ。」

「どうする? さっさと殺して俺達の地位大幅アップの踏み台になってもらうか?」

「ああ、そうしよ... やっぱ止めだ。ここら辺にいる...。」

「いるって... ラファエルがか?」

「いや、奴なら俺達でまとめれば勝算はあるだろうよ。確かに奴は大天使の中では地位こそ上なものの実力はその中でも下の方だし……。」

「……なるほどな。これは危ない……。奴相手だと俺らはただの無駄足になっちまう。」

「……とりあえず、今日のところは引き上げるか。」

「どうしたのよ曜さん。」

「え? あ、善子ちゃん!? ちょっとボーツとしててね……。」

「らしくないわね……。ところで、曜さんは驚喰って人と知り合い?」

「そうだよ。奏くんは高校より前からの知り合いだね。その時から変わってないよあの可愛い顔は」

「やっぱり曜さんもそう思うわよね……。」

「お、すまない。少し用事が出来たから切るぜ。」

「ああ、了解」

「奏君、さっきの電話って霊苑君と?」

「ああ、よくわかったな。まあそれはおいといて、着いたんじやないか?」

「おっと、そうだね。」

今日はダイビングをしに来た。ついでに泳ぎで体力付けにもな。

ちなみに、俺と帝と他校の選抜メンバーの東洞院 楓（ひがしのとういん かえで）でな。

言つとくが、西洞院じゃなくて東洞院だからな。別に保身を旨とするようなタイプではない。

「さて、早速道具貸してもらいに行こうぜ。俺と楓で色々することがあるから、奏はあの家に行つといてくれ。」

あの家……。知ってるのかつて？ 勿論。だつてさ……

「いらつしやい。ダイビングの道具を借りにき……。あ……。貴方……。奏じゃない!? 私よ。覚えてる?。」

「勿論ですよ。果南ね……。果南さん。」

8話 海獣の王 降臨

「随分久しぶりだね。」

この人、松浦果南さんは会長の昔からの友人で、会長と遊んだときに何回か遭遇して一緒に遊んだことがある。

しかし彼女、昔は同じくらいだったのに今では俺より背が高い。あと、色んな部分が大きくなっている。というか、目線を少し下にするだけでガン見してると思われるんだが…… 低身長 of 辛いとこだ。

「本当に懐かしいですね。」

「そうだね……。やっぱり可愛いな奏は。食べちやいたいくらい 冗談だけどね。」

…… まあ、果南さんなら冗談だろう。会長や理事長辺りが言う文字通り喰われそう。俺が喰うのは鳥だよ。驚喰だけにな。

「でしょうね。あ、それで今日はちよつと……」

俺は色々を説明してダイビング道具を貸してもらい、帝達とダイビングをしていた。

ダイビングを終え、その後は普通に泳いでいた。俺、普通に泳げるんだぜ。楓程ではないが……

が、途中で

「俺、ちよつとあつちの方に行つてくるわ」

「おう、わかつた。ちゃんと戻つて来いよ」

俺は別の場所に移動した。

なぜかつて？そりゃあ…

「…なあ、出てこいよ怪物。」

「ほお…。私に気づくとは、やはり貴様がラファエルに憑依された者か。」

その怪物が海から出てきた。蛇と竜が合わさったかのような姿で、かなりでかい

「何者だお前は」

「私はレヴィアタンという悪魔でな…。まあ、お前ら天使で言うハニエル辺りの存在

だ…」

「お前…。かなり大物『変わつて貰うわよ。』」

ラファエルに変わられた。どうやら奴はかなりの強者のようだ。この前のベリア

ルや今までの下級共のようにはいかないだろう…。

『それで、貴方は何をしにきたの？』

「貴様ならわかるだろう。貴様がサタン様の計画の邪魔になるから討伐しにきた。いくら大天使といえども貴様はその中でも強さは下位。私なら討伐出来ると判断されてこ

「ここに来たまでのことだ。」

『なるほど… 計画と言うのは何かしら?』

「貴様を知る必要はない。ここで死ぬのだからな!」

『このブレス… エアスラッシュ!』

奴の水圧ブレスとラファエルの風の刃が相殺される

『なんて威力… あのブレスは当たったらヤバいわね…』

「ウォーターレイン!」

『雨雲ね… 竜巻!』

「雨雲を払っただけで安心するなよ 圧縮! からの… 水蒸気弾!」

『竜巻! これでどうかしら?』

「隙有り! もう一度喰らえ!」

『しまっ… うぐっ!』

ッ! かなり痛手を負った… 少しうまく場所を外してダメージを抑えてもこの威

力… やはり直撃は危ない

『ヒール!』

「回復したところで無駄だ ウォーターレイン!」

『… この雨… 動きを抑える効果があるみたいね』

「とうとう諦めたか…… 海に沈めてやろう。」

『馬鹿ね…… ウィンドエッジ!』

「何! ぐおお……」

奴の尻尾に大量の小さめの風の刃を直撃させた。結構効いてるようだ。

『沈めるのはこつちよ…… ウィンドプレス!』

風を圧縮させた空気弾を奴の頭に直撃させた。すると奴は海に沈んだ。

『さあ、第二ラウンドと行こうじゃない。水中で殺してやるわ!』

そのまま水中に潜った。

「貴様…… ここで追い討ちをかけるつもりか…… ここだと貴様が不利だというの

に…… ウォーターライフ!」

『…… 確かにここでは不利ね…… けど……』

彼女はそれを華麗に避けてから

『こつちだつて考え無しに来たわけじゃないわよ。 ウルトラハリケーン!』

彼女は奴の真下から強大な竜巻を起こした。

「ぐおお……! 貴様ア!」

そのまま竜巻で奴を打ち上げた。

『作戦成功! この竜巻はどういうわけか雷を纏っているのよね。水は電気をよく通

すって言うでしょ。そしてそのまま……』

そのまま上がって追い討ちをかけるつもりだった……

「アクアテール！ 海底へと沈め！」

『しま…… うあアツ！』

奴の尻尾打撃をそのまま喰らって海に沈んだ。

「さて、止めをさしてや…… ぐっ！なぜここに氷柱針が…… そして何故私が落ちた

直後に大量の氷の礫が…… ハア…… ハア…… 今日撤退だ…… 恐らく他に誰か

いやがる……」

俺の意識が遠のく中、奴が何処かへ去っていくのが微かに見えた。

番外編

番外編Ⅰ 主人公設定

名前 鷲喰奏（わしばみ かなで）

年齢 16歳（高校2年）

身長 155cm

体重 60kg

好きな食べ物 カレー ハンバーグ オムライス 寿司

嫌いな食べ物 納豆 梅干し コーヒー（ただし砂糖とミルクをたっぷり入れたコー

ヒーは好き）

特技 シュート チーズケーキ作り 甘える 雑務

趣味 RPG アイドル ネットサーフィン

憧れの人 南ことり 優木あんじゅ

浦の星学院に通う高校2年生 サッカー部所属兼生徒会会計

シュートはプロを混ぜても世界でもトップレベルではあるが、ドリブル等は普通より

は上手い程度 キーパーやDFは全然ダメ。

全国選抜メンバーであり、そっちの方に行くため生徒会の仕事はほとんどしてない。小学生の頃からサッカー関連でテレビにも出ており、その影響で曜とも知り合った。

非常に可愛いらしい顔立ちで、身長も小さい。（少なくとも鞠莉 曜 善子 梨子 ダイヤからは可愛いという評価を受けている）しかし筋肉は結構ある（着痩せする）両親は医者で、かなり大きな病院の院長である。

姉からはかなり溺愛されており、鬱陶しいと思ってる割にはまんざらでもなさそう。Aqoursの事は密かに応援している。本人は友人としての役目だとは言ってるが

同じ高校の帝とは最大のライバルにして最高の仲間であり親友
恋愛にはあまり興味を示す様子は今はない。

大天使ラファエルに憑依されている。

なぜラファエルが奏を選んだかという点、奏に産まれた時から何故か魔力が存在しているから

そのため現界している状態にも関わらず普段通りの強さが出せる。
魔法の属性は風 癒しの天使なので回復も出来る。

各キャラとの関係 〔内には呼ばれ方

千歌：一年の頃からのクラスメイトで友人 弁当の一部をとられる。【奏くん】

曜：小学後半頃に出会った友人 何気に家もそんなに遠くない スポーツは違うが、境遇が似た仲間良き相談相手でもある。【奏くん or 奏】

梨子：クラスメイト 千歌達との関係で仲良くなった。【鷺喰くん】

善子：同じ境遇の者 何気に家近い【奏 or 鷺喰】

ルビィ：妹っぽいのが、最近は会わなくなつたので、それでもなくなつている【奏くん or お兄ちゃん（稀に）】

花丸：まだ会つてない【鷺喰さん】

ダイヤ：生徒会の先輩 弟のように扱われている（恋愛対象ではない（かも）です。

【奏さん or 奏】

鞠莉：最近仕事を手伝っている先輩 思わせ振りの発言に困っている 相談相手その2【奏】

果南：昔の知り合いではあるが、まだ再会はしてない。【奏】

この先

先の内容は、実は既に骨組みは完成している状態です。

予定では3月頃に完成するつもりです。（大学編？受験終わったら考えるかもしれないな

い。

他に出す予定の男キャラもいますし、Saint Snowのお二人も出来たら出したいなど。。。

番外編では、奏vs帝のPK対決とかAqoursメンバーと遊ぶとかやってみいたいなど。。。

μ'sも出てくる可能性も微レ存

特別編

特別編

小原鞠莉生誕編

「Finish! Winning team is ○○ university!
!」

「Yeah! We win the game!」

「Hey! Kanade! Thanks to you, we could win
the championship!」

これらを直訳すると..:

「終了!勝チームは、○○大学です!」

「奏!お前のおかげだ!」

みたいなことになっている。

俺は高校卒業後、アメリカの大学に留学している。在学中にここの大学の教授から来ないかって誘われたんだ。俺の試合を見たいらしい。

それで、俺らのチームはこの大会で優勝した。そこそこ大きな規模の大会だし、非常に達成感がある。

※ここからは、日本語に翻訳させていただきます。

「それじゃ、早速飯に行こうぜ!とりたいところだが、俺らは今はかなり疲れてるだろう。また後日にしようぜ。奏のこともあるし...。」

「あ、すまないな。わざわざ俺に合わせてもらって...。」

「気にするな。お前は行ってやれよ! それにMVPがない中打ち上げやるのもあれだしな。」

大学のチームメイト達は、俺の事を気遣ってくれている。凄く嬉しいことだ。別に俺抜きで楽しんできてもいいのによ...。

帝達と離れたのは寂しいとは思うがな... まあ、それは仕方ないことだ。

え?これからどこに行くのかって?彼女との約束だよ。誰だつて?それはだな...

「お疲れ様奏! かっこよかったわよ最後のシユート」

「鞠莉さん...。ありがとうな。わざわざ見に来てくれて。」

「当たり前じゃない!彼氏のかっこいいところは見たいし♪」

そう。高校も一緒だった先輩の鞠莉さんだ。

彼女は卒業後この大学に留学した。それから俺もここに誘われてだな。

そこから鞠莉さんに会った。そしてしばらくして俺らは付き合うことになった。どっちからかって?言うわけないだろ...。お前らで勝手に想像してろ。

「さ、行きましょ♪」

そう言つて彼女はいかにも高級そうなレストランに俺を連れてきた。

「さ、今日はここで一緒に食べましょ♪」

早速俺達は中に入り、食事をした。

「…：. そういえば、今だから言えることなんだけどね…：.」

「どうした？」

「私、高校の頃から好きだったのよ、奏のこと。結局伝えられずに留学したけど…：.」

「はは、実は俺もだったんだよな。」

「ふふっ♪」

「どうした？」

「相変わらず可愛い笑顔ね♪昔から変わらないわ。」

よせ、照れるだろ…：.。

食事が終わり、今日は夜遅いし鞠莉の家に泊まることにした。

「ねえ、そういえば前に何か一つお願いを聞かつて言つてたよね？」

「あー…：. そういえば言つてたな。それで、結局決まったのか？」

「今日、一緒に寝てほしいのよ。」

「ああ、わかった ってえええ!？」

驚いた。いきなりこんな事を言うとはな。

しかも、彼女はかなり薄着だ。こんな美人が隣で寝てて寝れる訳がない。

「だって… 奏最近忙しそうだったし…。」

あー… そう言われるとな…。

そんなわけで、俺達は広いベッドがある寝室に移動した。

「ふふっ♪さ、奏もこっち来て」

こうなれば仕方ない。俺も… と思った矢先…。

「あ… 奏ったら…。そんな私とシたいの？」

足を滑らせて、見事に鞠莉の胸にダイブした状態になった。

俺は咄嗟に離れる。

「い、いや、別にそういうわけじゃ… // // //」

「… 下の方は正直ね。」

そう言うのと、俺は彼女に近づいて無意識に彼女の服に手を触れていた…。

「うん．．．」

気がつくと、俺達は下着の状態です。ベッドで寝ていた。

頭と腰が痛い上に昨夜の記憶があまりない。

というか、今日は彼女の誕生日だ。俺は急いで隠していたプレゼントを持ち出す。

「あら、奏もう起きてたの、おはよう。」

戻ると少しして彼女も起きた。が、

「うん．．．　奏昨日激しすぎよ．．．　私は良かったけど今起きれないじゃない．．．　今

日は．．．」

彼女は少し不機嫌な顔で言った。

「今日は．．．？」

「今日は、その．．．　ね．．．」

鞠莉が何を言いたいかは解る。

「誕生日おめでとう鞠莉．．．　愛してるぜ．．．」

俺はそう言ってプレゼントのネックレスと花束も渡し、彼女にゆつくりと口付けした